

訓読『平家打聞』(二)(巻四)

中世文学輪読会

前回(本誌34号)に引き続き、島原松平文庫本『平家打聞』巻四の

試読を提示する。前回掲載分については、村上学氏・今井正之助氏より、早速に御批正をたまわった。とりわけ今井氏には、書面をもつて、文字の誤脱等の初歩的なあやまりはもとより、訓読結果についても多くの有益な御指摘をいただいた。記して深謝申し上げたい。

なお、今回、今井氏御指摘のものを含め、前回分の正誤表を末尾に掲げた。(稲田)

凡例(追加)

○巻四の被注釈語(見出し語)の検出については、汲古書院刊影印本が欠巻のため、野村精一氏蔵本・巻四によって、被注釈語の位置(丁数・行数)を各段落ごとに示した。その際、『文学』(昭31・11)所載翻字本文により、不審な箇所は、早川厚一氏・佐伯真一氏・生形貴重氏『四部合戦状本平家物語評釈』(七)巻四(昭62・12私

家版)を参照した。

○底本の訓点に従って読み下すのを原則としているが、訓点の施し方が明らかに誤りと判断できる場合には、底本の訓点を無視して読み下し、注に原文を掲げた。

○和歌は、今回より原文通り一行書きとすることにした。

○今回掲載分に対応する依拠資料は次の通りである。

巻四「比叡山」注↓「私聚百因縁集」巻七「六」(伝教大師事)
(引用の際は古典文庫によった。)

平家打聞第四巻

藤中納言は信西入道三男、桜町中納言是なり。左京大夫は、成憲の弟、信西四郎の子。御魚味は鯉。大臣の大饗、八州嶋詣に云ふ。抱丁是なり。国王の位に初めて切りたる鮫を進むるなり。穆王とは

穆公の子。孝殤^{かう}皇帝は漢の明帝の孫子。踐祚^{せん}は、台を踏み始むる事。六条院は二条院の御子。後白河院の御孫子。御母は大藏大輔。紀伊兼守が娘。准三后は国王を我が任に育て奉る事。父母乳母の義、此の三つを合はせて、准三后と云ふ。又、后、更衣、懷胞、此の三つの義。法興院の入道とは、二条関白殿の御父。東大寺は聖武天王の御願。興福寺は、淡海公の御願。

- 藤中納言—一才4 左京大夫—一才4 御魚味—一才7 穆王—一才2
孝殤皇帝—一才4 踐祚—一才5 六条院—一才8 准三后—一才10(准
三後) 法興院の入道—一才2 東大寺—一才6 興福寺—一才6
① (山)による。(底)「八州州」。

比叡山は、桓武天王の御願、伝教師の草創なり。抑、大日本国四明天台の嶺、比叡山最初根本伝教師と申すは、俗姓は三津氏、江州の西岸志賀の郡の人なり。幼稚^{ちうい}にして衆心賢く、七才にして衆語を明らめける。小童にして兼て数事を知る。仍つて世の人の思ひに常途に異なれり。十二才にして髪を剃る。始めて比叡山に入りて庵を結び、勤行は、常に山神高座天王等の加護を蒙り、鎮^{とこな}へに衆星を影向を見る。剩へ、香呂^{かうりよ}の灰の中より、仏舍利を得たり。器に入れんことを求むれば、火中より黄金の花器を得たり。今の惣持院の舍利、是なり。言の情^{ことば}を案ずるに、迦竹始めて、仏法を漢土に渡し、舍利、空に登りて光り、日輪を奪^{うば}ふ。聖徳太子、日本国に

生まれたまひしに、舍利を手に捧げ、「南無仏。」と唱ふ。伝教^{でんぎょう}行ずる時、仏舍利を先立て、此のごとし。当に知りぬ、如来の御使として、仏法を弘宣し、群生を済度^{しやくど}すべき先表なりと。就中、如来の御舍利は、値ふこと難く、聞く事も希なり。若し一花を供養するは、千反天に生まる。

比叡山—四部本文では「山□」(二才6—7)とある。「山門」か。

- ① (百)「幼稚」。
② (百)「衆星影向」。
③ (百)「事情」。
④ (百)「伝教行—叡岳洞—給時—仏舍利先立如レ此」。
⑤ (山)「群生」による。(底)「群生」。

復た法花経に云はく、「諸仏滅後已供養舍利者如是。諸人等皆已成仏道。」と云々。此のごとく拙く勤行する程に、彼の峰に鎮護国家の大伽藍、根本中堂を建立し、後には止観院と号す。伝教生年廿一なり。時に、桓武天王の治天、延暦六年(丁卯)年。彼の寺の本尊は則ち伊王善逝^{いおうぜんし}十二生を在す。大願の如来、皆令満足の世尊なり。像法転時の利生を馮みて、未来悪世の衆生を哀れみたまへば、思し食され、心願慇^{いんごん}にて、自ら斧を取りて、御衣木に向ひ、祈念して言はするは「南無十二上願の薬師瑠璃光如来、此の峰に、大乘の教行を至極しぬるを久しく留めて、末代の罪濁の衆生を済度したまへば、此願満足を念じたまへば、我を礼し返したまへ。」とて、

一度削りては三礼す。是のごとく一心精進にして、感応時に至り、木像の薬師、烏瑟の御首を順けて、大師を三礼し返したまへり。爾の時の信仰の涙、幾十万ぞや。詞を以ても云ふべからず。其の心願は、法をして久しく住せしめて興法利生の事なり。大師自ら詠じて言はく

あのかたら三藐三菩提のほとけたちわかたつそまにみやうかあら
せたまへ

故に、止観院の十二の常燈誓ひて、一度挑けてより後は、四百余才、延暦六年〔丁卯〕より、元亨三年〔癸亥〕に至るまで五百卅一年、彼の灯未だ滅せず、弥以て繁昌する所なり。

- ① (百) 「在^ス医王善逝^ノ」 十二大願、如来皆令満足、世尊ナリ。
- ② (百) 「哀^ニ未来^ニ惡世^ニ衆生^ヲ被^ル思^シ食^シ也^ト」。
- ③ (百) 「至極大乘教法久留^テ濟^シ度^ニ末代罪濁衆生^ニセント念^フ」。
- ④ (山) 「精進^ニ」による。(底) 「精進」。
- ⑤ (百) 「千」。
- ⑥ (百) 「令^テ法久住^シ興法利生^ニ事ナリ」。
- ⑦ (山) による。(底) 「ヲセタマヘ」。
- ⑧ (百) 「自^リ延暦六年〔丁卯〕二至^ル正嘉元年〔丁巳〕二四百七十一年」 (以上割注)。

爾の時の御門桓武天王は、日本帝王五十年代、速疾頓悟の至極大乘の仏法を異国に求め、和国に弘めんと云ふ願を深く思ひたまへり。依りて天下に最上利根の人を拵んで、遂に二人を定む。一人は伝教、

一人は弘法。而るに弘法は、法光不動の権化と聞こへたまへば、此れも共に一但一同に、唐へ渡る。唐の上人たり。伝教定めて只人は在さず。身子富樓那は共に、頭角の々々、仍、共に本は是れ菩薩なり。文殊観音、大悲等行の菩薩なり。仍、同じく亦是れ古仏なり。而るに、伝教弘法は是れ一機に在す。大地をば、豈に権実各別せんや。凡そ渡唐の後、道遂和尚、行帰座主本に値ひて、一乘円宗を極む。一を得ては万を知り、表を聞かば奥を極むること、流水よりも速し。彼の仏瀧山の行帰座主、「昔を聞くに、知者大師の言はするに、『我死して二百余年に、必ず東国に於て我が法を弘めん。』と云々。聖詞も地に落ちず、仁者則ち、其の人に当たれり。早く本国に歸りて、道を弘めたまへ。」と。而して、多くの深き法を授けたり。

愚検して云はく、天台大師は即ち、隨の開皇十七年〔丁巳〕十一月廿四日入滅〔御年六十一〕。日本推古天王の御宇第五年、其れより二百八十年、唐は長元廿年〔甲申〕、日本は延暦廿三年、行帰の詞は夫れに当たれり。一乘円宗は三世諸仏の出世の本懐、一切衆生の成仏の直道なり。若し法を聞く者有らば、一も成仏せざるは無しと云々。誰か婦ひたまはざらん。加之、次に以て竜興寺において、順暁和尚に對ひて、長元廿一年の四月、真言を伝へ、灌頂に及びたまへり。故に、顕教密教の将来の祖師、真言天台伝教の大師なり。真言は則身大日頓悟の教、事理俱密、三摩地の法なり。尤も行ずる

に依るべし。既に智者と伝教は、迹異なると雖も、本は薬王菩薩に同じ。天比処^⑧は別なりと雖も、宗は同じく、一乘円頓なり。而して後、延暦廿四年帰朝す。

先づ同じき九月に、桓武天皇に奏して、清滝^{きよたき}の高雄寺に於て灌頂を行なはる。爾の時の宣言に云はく、「真言の重き御法、未だ和国に伝はらず。阿闍梨始めて伝へ渡せり。国師と爲るに足れり。」と云々。東寺天台二流の中に、天台灌頂の起こりは是なり。其の後慈覚大師に、官符を申し下して惣持院を立て、灌頂堂を造らる。永く公家の爲に伝へ行ふ処なり。又、帰朝の後八年、嵯峨天王の御時、弘仁三年(壬辰)七月、法花講堂を造り、丁寧に智者大師の跡を伝へ、大乘を講せしむ。日本一州多く円宗に帰す。五幾七道、併、一乗盛んなり。

- ① (百) 「此^{こゝ} 一共同^{いっどう} 供渡唐^{くわにやう} 上人タリ」。
- ② (百) 「身子富楼那^{ふろうな} 供頭角声聞仍共是本^{ほん} 菩薩也」。
- ③ (百) 「本地」。
- ④ (百) 「値^ち 道遂^{だうすい} (禅林寺) 和尚^{じやうしやう} 一行満座主等^{いっげふぜんざいとう} 極^{ごく} 一乘円宗^{いっせうえんしゆ}」。
- ⑤ (百) 「青龍寺」。
- ⑥ (百) 「行満座主云昔聞^{いっげふぜんざい云昔聞} 智者大師云^{ちやうぢやうだいしゆ云}」。
- ⑦ (百) 「伝燈大師」。
- ⑧ (百) 「天台比叡雖^{たいたいひいざいすい} 二処別^{にこゝろべつ}」。

爾の時、宗論有りて諸宗の高宗、諸寺の長老擽^{つゝ}けて、伝教に敵対す。遠近都鄙悉く大師を難破せんとす。爰に一つの不思議有り。徳

一大師と云ふ人、彼の宗論の爲に奥州より上らる。但し、常途の儀に非ず。遠道^①に彼の乗せ負ひたる牛の角の会に机を立て了えて、天台を破る論を作る(彼の論、今の世に露翫^③はれず)。此くのごとく上らる。叡山を見上げて云はく、「伝教小伊は、彼の所にこそ有りけん。」と斜氣^{しやうき}に言ひたりける時、舌口の斫くるがごとく痛む。弥伝教大師の感徳、有り難く聞こえり。伝教は徳一を鹿食者とを名づけたまひける。円宗の法門を、生け喰ひたると云ふ義なり。但、徳一も只人には在ざざりけるか。本は西大寺の沙門。家を尋ぬれば、左大臣藤原惠美卿の第四男。嵯峨の天王の勅命を承る。弘法大師の講訓^{くわん}に順ひ、東州^④へ修降^{しゆかう}し仏法を弘通し、勤行^{ごんぎやう}当時に被り、将来に利して、而るに徳一建立の伽藍、諸国に数多^{あまた}あり。常奥両州の境に殊に盛んなり。会津石弟山^{えつしんせいでいざん}に清水寺(会津大寺)を建立す。大同元年(丙戌)、平城天王元年。爾の時より今元亨三年(癸亥)に至るまで五百一年なり。後の時、彼の寺をば、弟子に付属す。名を金与と曰ふ。

爾の時、一首の詠歌有り。
えんあらばわれまたこんよいはしみづやまのふもとのきよみづの
てら

今世には此の寺をば、恵日寺と号す。爾れより、陸国を出でては、中禅寺に還り、所々に寺々を建立す。草創羅楼^{そうそうらろう}に違^{たが}あらず。凡そ

彼の聖跡に付きて、歩みを運ぶ者必ず利生(リセイ)に蒙る。頭を低るる輩(ウラギ)、定めて災難を払ひ、二世の悉地を成ずること、響の声に応ずるがごとし。代澆季に至ると雖も、徳一建立の寺には、今に雀(スズメ)の入ること無し。誰か徳一大師、権者の化現なるを疑はん。征伐(セイバク)を喧(ウラ)しくする事、仏菩薩の常義なり。或いは云はく、徳一と修円和尚とは、血脈の弟子なり。大和国神野の山にて勤め励む。而して、天の告げを得て、東州へ修行すと云々。

此くのごとき事、伝教の高徳、誠に甚しき物なるに、尚聞く、伝教大師、入唐求法の願を遂げんが為に、豊前国宇佐宮に於て、大菩薩に法楽の為に一乗経を講じ奉りたまへば、大菩薩、齊殿(サイテン)を開きたまひて、託宣に云はく、「我久しく聞かざる一乗醍醐の御法たり。大乘を聞き奉るの恩甚だ重し。」と。則ち自ら紫の神衣を捧げ、伝教に施し与へたまふ。社司(シヤジ)神官此の事を見て、未曾有なりと嘆ず。爾の時の大菩薩の御衾、今に正しく叡山根本御経蔵に在り。

- ① (百)「遠路牛被(トウロウウシカ)乗。牛角間立(トウカウマダテ)机」。
- ② (山)「作(サ)破天台(ハクテ)論」による。(底)「作(サ)破天台(ハクテ)論」。
- ③ (百)「無披露(ムヒロ)。不(フ)訛」。
- ④ (百)「修(シユ)行東州(コウシュウ)」。
- ⑤ (百)「令(シ)被(カ)當時(トキ)利生(リセイ)募(ム)将来(キヤウライ)」。
- ⑥ (百)「今至(イマニ)正嘉元年(テイカ)丁巳(テイシ)四百五十余年(ヨシウブニ)ナリ」。
- ⑦ (百)「誰疑(タレガウタガハシ)得(トク)一大師大權迹化(イツダイシダイケンシヤクカ)云事(クモト)互助(イタヒカケ)行化(コウカ)喧(ウラ)征伐(セイバク)事(コト)、

仏菩薩常儀也。

- ⑧ (底)「喧(ウラ)」。
- ⑨ (百)「得(トク)一修因和尚血脈弟子(イツシユインワウノケツミツトシ)ナリ」。
- ⑩ (百)「奉(ホウ)為(ニ)大菩薩法楽(ダイハツサツホウガク)奉(ホウ)講(コウ)二乗経(ニジョウキヤウ)」。
- ⑪ (百)「我久(ワガキウ)不(フ)聞(ク)二乗醍醐御法(ニジョウテイコウミホウ)。依(ヨリ)上人(ウヂノウヂ)行詣(コウキ)聞(ク)此深法(コノシニホフ)奉(ホウ)聞(ク)大乘(ダイジョウ)其恩重(ソノオンオモシ)」。
- ⑫ (底)「社司(シヤジ)神官」。

又聞く、大師春日の社①にして法花経を講ぜらるるに、峰の上より紫雲立ちて、法庭に覆へり。此れ等は皆、大師の誦経に、神慮を解(トク)験(ケン)はす。凡そ神明は顕験し、権現は理事②に訓ず。高徳の致す処なり。権化の定法か。所謂役③の行者の熊野権現、金剛象王。伝教大師の法④宿権現、高座天王。弘法大師の丹生の明神。徳一大師の石弟権現。大朝大師の白山権現。勝道上人の日光大菩薩。慈覚大師の赤山摩多羅神。智証大師の新羅明神。行教和尚の宇佐宮。皆是れ明神の仏法を貴み、権現の行徳を喜ぶ儀なり。惣じて伝教大師の行徳、学跡⑤尽くし難し。抑殊⑥に春夏秋冬、初月毎に十二人の当僧(トウモウ)を以て、三七日の懺法を行なはしむ。法花懺悔は、南岳大師の製に依りて、深く普賢観経より出でたり。観無生懺悔の前には罪福俱に空なり。故に経に云はく「我心自空罪福無量観心無心法不住法。」已上。四種三昧の中には、半行半座三昧なり。一心に奉請し、一心に敬礼す。六情根の懺悔は、順流逆流の十心本なり。懺法の全要は、発願の文

段なり。之の文にははく、「我が弟子至心に発願し、願はくは命終に臨みて心乱れず。正念して安楽国に往生す。面に弥陀の衆生に値ひて十地を修行して常示を証し奉る。」已上と。

- ① (山)「社」による。(底)「社」。
- ② (百)「馴」理給事。
- ③ (山)による。(底)「後」。
- ④ (山)による。(底)「押」。
- ⑤ (底)「令行」。
- ⑥ (山)による。(底)「雨」。
- ⑦ (百)「正念往生安楽国」面奉下弥陀値聖衆修行十地證中常樂上。

南岳は本地観音にて在す。夫れ南岳は六根を清め、天台は悟りて五品に登り、智者は七才にして寺に行きて、一度聞きて普門品を得十八にして頭を剃り、初めは大蘇寺に往き、南岳に値ひて、三経を伝ふ。読誦する事、二七日に至る。薬王品に云はく、「是名真法供養如来。」の文の処に、法花三昧陀羅尼懺法の得力を得たりしこと、是くのごとし。而るに、天台大師最後の時、「四十八願莊嚴淨土花池宝閣に往き易く而るに人無し。」と唱ふ。又云はく、「即指西方値仏の悟を開け。」と。知りぬ、兩大師弟共に往生極樂すること。法花懺法、尤も依行すべし。今亦、傳教大師、是くのごとく、往生を願ひ求む。悉く、誰か之れを論ぜんや。傳教大師、法花長誦を製作し、其の切に発願回向して云はく、「転読一乘妙法蓮花経、願共

諸衆生往生安楽国。」已上。而るに、傳教大師は、弘仁十三年(壬寅)六月四日卒す。御年五十六。爾の時、奇雲峰に覆ひ久しく去らず。遠久之れを見て恠しむ。定めて故有らんと云々。是れ則ち大師人滅の靈瑞なり。

- ① (山)「三経」による。(底)「三経」。
- ② (百)「得」法華三昧陀羅尼懺法徳力如レ此。
- ③ (百)「唱」四十八願莊嚴淨土花池宝閣易往無人。亦云、即詣西方値仏開悟。知、兩大師弟共に往生極樂法華懺法尤も依行。
- ④ (百)「傳教大師如レ此令レ行願求往生志誰論レ之乎」。
- ⑤ (百)「其功」。
- ⑥ (百)「遠人見レ之」。

(以上、担当田中)

園城寺には、智証大師の草創、天智天王の御願、精水濟水花水此の三つ有る故に三井寺とは云ふなり。天智天王の鵜湯には精水を取り、天武天王の鵜湯には濟水を取り、持統天王の鵜湯には花水を取る。是のごとく、三代の帝の鵜湯を取る故に三井寺と云ふ。

前白河院は三条院の太子。(葵丑)即位。在位十四年。

園城寺—一オ7 前白河院—一オ8 (□白河院)

- ① ② (山)による。(底)「鵜湯」。

賀茂明神は大力男神なり。熊野金峯山皆此の例なり。大菩薩も亦贊むべからずとなり。靈託の文に云はく、「得道来不動法性、自八

正道垂権迹。」と。其の理顯然たり。尤も信仰すべし。今、和光化現の縁起の由来、往生の御方便を置く。応神天王御誕生より、石清水男山の御身に至るまで、粗、是を考へ申すべし。

応神天王とは〔仲哀天王第四の御子〕、治天九年、御父を仲哀天王と申す〔仲哀は、人王三十二、大和武の代、景行天皇の孫子。尊の御子〕。御母は開化天王五代の孫子、思長宿祢の娘。人王十六代の御門なり。治天十一年〔御年十一才にて有り〕。御父の帝と申すは、治天九年の二月、崩御。御年五十二。

賀茂一ニツ五

① (山)による。(底)「能」。

② 「仲哀は、人王三十二代景行天皇の孫子。大和武の尊の御子。」とあるのが本来か。(底)(山)ともに不審。

応神天皇の御誕生は、神功皇后異国の合戦より帰朝するとて、七日と云ふに、十二月十四日、筑前国にて御誕生あり。命彦宮とは是なり。其の故は、人王十四代中哀天王元年〔壬申〕、長門国に都を移してより九九年、〔庚辰〕年、新羅高麗軍を発して日本国を討ち取らんとす。自らも亦、官兵を発して差し迎へて相戦ひて、異国の輩退散す引退す。仲哀の崩御に二つの儀有り。一つには、日本紀に云はく、「仲哀の御宇九年の春二月、天王崩じたまふ。」と。二つには、香椎の宮の縁起に云はく、「仲哀天王は異国に矢に当たりて崩

じたまふ。秘かに、天王の御骨をば、武内の宿祢、海路より長門国豊浦の宮へ送りたまふに、則日に御葬送せず。」と。扶桑記に云はく、「神功皇后御即位〔辛巳〕、其の仲哀天王て葬を河内国長野山に移す。」と云々。

① (山)「発」による。(底)「発」。

② (山)「香椎」による。(底)「香椎」。

③ (山)「送玉」による。(底)「送」。

神功皇后は、仲哀天王崩じたまふ〔庚辰〕年、新羅を賈めんと思し食し立ちて、豊前国にして船樹山の木を切り、宇佐郡にして四十艘の船を造りたまひて出で立たんとす。合戦の時、聖母の御姉河上大明神を竜宮城に遣はして干珠満珠の両珠を借りたまふ。三ヶ日を經て、河上大明神両珠を持ち来たりぬ。神功皇后は亦、胎内の王子に契す、「産育の月を延べたまへ。」と。而して、四王の嶽に登りたまひて、天地に合掌し祈念す、「願はくは、天神地祇海神諸共に我に力を合はせて、異国の輩を討たしめたまへ。」と。又、船に乗る人々は住吉鹿鳴諏訪高良大神等に契約を結びて、馮む兵は三百七十五人。異兵は十万八千艘、四十九万六千余人なり。爾の時、敵の国の軍兵、日本の兵船を嘲哂して云はく、「日本とは賢き国と聞くに、船の数も少なく、大將軍は女人とは如何。」と。時に、皇后干珠を海に入れたまへば、海水忽ちに乾て即時に陸地と成る。異国の官兵

喜びを成して、船より下りて近く迫るなり。時に、皇后満珠を取り

て、亦海に入れたまへば、海水本のごとく充滿す。仍つて異国の官兵皆悉く溺れて死す。敵の陣に更に官兵無し。本朝の兵船勝に乗りて進奇す。両珠は五寸ばかり。頭は二寸、下は細きなりと云々。爾

の時、敵兵は為ん方無く、誓ひを立てて降を乞ふ、「我は則ち日本の犬と成りて、必ず彼の国を守護せん。全く虚言あるべからず。若

し尚敵心有らば、天道の責めを蒙らん。」と云々。爰に神功后皇（つぐみ）⑤にて巨石の上に書きたまふ、「新羅国の王は日本の犬なり。」と云々。

日本の軍兵帰国の後、石文を削りけるに、弥鮮かにして文字失せず。葉を繋げて焼けども叶はず。長子が筆の跡こそ木には深く入りけれ

聖女の文言遠く石を徹りけり。仍（つ）つて今に其の石文之れ在り、と云々。日本紀に云はく、「新羅の王の前後の代の験とて、皇后銚を

立てらる。今に其の銚之れ在り。」と。抑、時に、干珠満珠の両珠は河上（カハ）に之れ納まると云々。此の珠を竜宮より乞ひ請けたまひ

し時の約束のごとく、相違無く竜宮の聲に成りたまふ。肥後國にて若宮は生まれたまふ。爾の時、産屋をば鶴の羽を以つて葺きたまふ。

此れよりして、産屋をば鶴羽屋（ツルノヘ）と云ふ。八幡由来記に云はく、「皇子皇女は竜宮の娘の腹にして御在す。神と頭はれたまふ時、亦若宮

は若宮殿とて声訓（コト）みに読まれさせたまへば、持者（モチモノ）を頭はし御在す故に、若宮とは示現したまふに、靈夢にも少兒と見へさせたまふ。」

と云々。

① (山)「黄」による。(底)「黄」。

② (山)「延」による。(底)「延」。

③ (山)「登下」による。(底)「登」。

④ (底)「云日本」。

⑤ 黒田氏翻刻も同じ。「彈」か。

⑥ (底)「仍今」。

凡そ、神功皇后は仲哀崩御(庚辰)の年、異国の合戦を打ち順へて、帰国の後王子誕生す。思し食す様、而して御兄弟加子坂（カサカ）恩弟（オトコ）熊王とて二人御在しき。王子誕生の事を聞き、本意無く覚えて秘かに計を成す兵を語らふ。爾の時、武内の大臣に仰せて彼の二人を打たせらる。此れは即ち、其の年(辛巳)の春の天。其の年神功皇后御即位あり。人王十五代の帝。治天六十九年。大和国古市郡に都を遷し、六十九年(己丑)四月薨ず、と。御年百歳。又、次の年(庚寅)応神天王御即位あり。其の年に同じく大和高市郡に都を遷し、四十一年、一天の聖王万機の主上として掾も忝く御在しき。御宝算百十一。河嶋安気の宮にて崩御(庚午)。今の賀茂明神と申すは其の時の守護神なり。

① (山)「御在」による。(底)「御在」。

② (山)「聞」による。(底)「聞」。

故紫路は胡國。諸衛は藏人。院司は奏者。御余波は名残慕はしき

事。後三条院は後朱雀院第二の太子。(戊申)即位。在位四年。冷

泉院は村上天王の第二の太子。(戊辰)即位。二年。凶徒は夜討強

盗山賊海賊には非ず。只朝威を背き、年貢土公を抑留する者なり。

百姓は公家の百官。使庁の下部は庁官を任せしむ。河上の建は新羅

国の王。身長は一丈八尺。三面を具足す。本朝を順へんと欲ふ時、

日本武尊起ちて、之れを討ちたまふ。乙目は色有る美女。体を学

ぶなり。化はざれば出でて討たれにけり。天狗は天に住す。故に天

と云ふ。食物人に異なれり。故に天狗と云ふ。周辞は堅く惜しむ心

固と謂ふは養の義、辞と謂ふは育の義。項年は年来の心。国威は十

善の心。朝制は勅命。憲性天王は出群王の子をば、秦始皇の甥。悪

王にして、目縦び五寸の王。清涼山は天台に異なれり。八逆は、

一逆には父を殺す。二逆には母を殺す。三逆には羅漢僧を殺す。四

逆には仏身より血を出だす。五逆には和合の僧を破る。六逆には師

を破る。七逆には妻子兄弟を殺す。八逆には主を殺す等。長者は関

白殿松殿の御事。定位は国王の位。田内は清涼殿。

故紫路―三才6 諸衛―三ウ4―5 院司―三ウ5 御余波―四才10 後

三条院―五ウ9 冷泉院―六才2―3 凶徒―八才4 百姓―八才6 使

庁の下部―九才5―6 河上の建―一才4 乙目―一才4 天狗―一

一ウ3 周辞―一二ウ2(固辞) 項年―二三才8 国威―一三才9 朝

制―一三才9―10 憲性天王―一三ウ5(憲性天王) 清涼山―一三ウ6

八逆―二三ウ7―8 長者―一三ウ9 定位―一三ウ9 田内―一三ウ9

(殿内)

①(底)「被化」。

②(山)による。(底)「任」。

③(底)「二逆」。

④(底)「二逆」。

⑤(底)「八逆」。

会稽は、呉王夫差越王勾踐を捕へ、会稽に込められて、身疲れ力

弱りき。後、呉王に随はんと云ふ時、呉王尿を勾踐に吞ましむ。越

王味はへて「吉きなり。」と云ふ。呉王は是程の者を切るに及ばず

とて、本国に返して、後に数多の兵を語らひ、呉国に越へて戦ふ。

呉負けければ、呉王を捕へて亦会稽山に込めたり。後、兵共に呉王

の口を開かせて、越王の尿を呉王に吞ましむ。後、則ち此の山にて

切りけり。会稽の恥を雪ぐとは是なり。

①(山)「疲」による。(底)「疲」。

披国は喜び開くと云ふ。王川は三井寺。玉花は興福寺。金聖は、

三井寺は常住の弥勒。金供は興福寺の仏。調達は獅子頰王の御子。

浄飯王の弟。斛飯王の嫡子。阿難の尊兄。外道なり。貴寺は三井

寺を讚めたり。精舎は伽藍の異名。仏陀依付の清浄ならしめんとて、

故に葺き粧ると云ふ。故に舎と云ふ。姑射山は内裏。諸宮は親王諸

家。上聞は天王の聴を驚かす故なり。講初は智を諍ひ、義を論ず。

講説と云ふなり。等坊は両方平等の義。師論は祖師先徳。乙甲は自宗他宗なり。異域は新羅百濟等。千金は大中少将。万呉は大中少納言。古武道は、古の田村利仁。天平は聖武天王。弘仁は嵯峨天皇。

奥州甲吉は赤頭四郎軍。公卿は大政大臣、左大臣、右大臣、内大臣、大納言、左大将、右大将、宰相、三位等。三公は左右内大臣。糟糠は觀に入らずと云ふ。塵芥とは人糞と云ふなり。奉咲は諸人嘲哂の義。叡土羊は御感に預かる事。白屋は公卿に非ずと云ふ。青侍は蔵人の司。帝序子は甥の融子。玉路は乘車昇殿。竹符は国の受領司。

九州は九国。符賀は官位俸禄。納官は除目弁官。百司は百官。万乘の聖主を苦しましむは、法皇鳥羽殿を押し奉り、悩ましめ、后宮を奪ひ返し、主上を苦しましめ奉るを云ふ。面塵の后犯を成すとは

娘の中の宮を犯せし事なり。七孝は、父の孝、母の孝、師の孝、君兄の孝、祖父の孝、伯父の孝、此れ等なり。宮承は、宮とは王達を謂ふ。承とは三公承相の位を謂ふ。大相国は前関白入道殿松殿。辯均は詔留を留むる事。光陰は日数を送るを云ふ。親王は法皇の第二の御子。高倉宮。顔色は今の宮の恩域。天下皆皇民なり。彼の恩甚だ重しと云ふなり。青鳥は文の名。鷹の翅に、蘇武書を懸くる事。

芳志は今の文を喜ぶ。疑胎たるは叡迷無しと云ふ事。清見原は天武天王。窮鳥は疲れたる兵の名。鳥羽院は堀河院の太子。(戊子)即位。在位十六年。唐帝は徳宗皇帝五代の孫。真宗天楽。守覚は鳥羽

院第五の王子。崇徳院の弟。中書は中務の唐名。二条院は後白河院第一の太子。(己卯)即位。在位七年なり。

披国一四ウ1(披閱) 王川一四ウ2(玉川) 玉花一四ウ2 金聖
一四ウ3 金供一四ウ3 調達一四ウ5 貴寺一四ウ5 精舎一
一四ウ6 姑射山一四ウ6 諸宮一四ウ7 上聞一四ウ7(三聞)
講砌一四ウ7 等坊一四ウ8(等房) 師論一四ウ10(師倫) 乙甲
一四ウ10(一甲) 異域一五オ2 千金一五オ3 万呉一五オ3
4 古武道一五オ4 5(古无道) 天平一五オ5 弘仁一五オ
6 7 奥州甲吉一五オ7(奥州甲活) 公卿一五オ8(九卿) 三公
一五オ8 糟糠一五オ9 塵芥一五オ9 奉咲一五ウ4 叡土羊
一五ウ4(叡幸) 白屋一五ウ6 青侍一五ウ6 帝序子一五ウ
10 玉路一五ウ10 竹符一六オ1(析符) 九州一六オ1(□□)
符賀一六オ1 2(□賀) 納官一六オ2 百司一六オ2(□司)
万乘の聖主を苦しましむ一六オ5 面塵の后犯を成す一六オ5 6
(成西塵后犯) 七孝一六オ6 宮承一六オ7 大相国一六オ9
辯均一六ウ2 光陰一六ウ3 親王一六ウ4 顔色一六ウ7 青
鳥一七オ2 芳志一七オ2 疑胎たる一七オ7(疑台) 清見原一
一九オ4 窮鳥一九オ6 7 鳥羽院二オ2 唐帝二オ2 3
守覚二三オ4 中書三三ウ1 二条院三四ウ6 7

- ① (山)「令清浄」による。(底)「令清浄」。
- ② (山)による。(底)「異拭」。
- ③ (山)による。(底)「亦」。
- ④ (山)による。(底)「清原」。
- ⑤ (山)による。(底)「第」。

(以上、担当稲田)

頁		上下		行		誤		正	
五八	下	1		漢の王莽は、真書のごとし。秦の超高は、秦の始皇の子、二世太子の臣下。	漢の超高は、秦の始皇の子、二世太子の臣下。漢の王莽は、真書のごとし。				
五九	上	2		大帝太后宮	大皇太后宮				
		6		醍醐天皇	醍醐天王				
		10		政を行ふ由	政を行ふべき由				
六〇	上	9		南殿	南庭				
		11		希世	希世				
		12		帝	帝				
		13		用ひたまはず。	用ゐたまはず。				
		19		爾に	爾も				
	下	10		都府の楼	都符楼				
		18		寔じたまふ	寔じたまふ				
		20		是れなり	是なり				
六一	上	4		寔じてより	寔じてより				
		6		藤原朝臣	藤原朝臣				
		11		託宣	託宣				
		12		罪せらるゝの士	罪せらるる士				
		19		雪むるの屍	雪むる屍				
		12		没しては	役しては				
		19		鬼神	鬼神				
		4		呼ぶと、三返して	呼ぶこと三返、而して				
六一	上	16		最初、根本伝教大師	最初根本伝教大師				
六三	上	10		旨をば、宜なるかとは知らんやと思ひ合はするなり。	旨をば知り、宜なるかなと思ひ合はするなり。				
	下	11		寄せ来る	寄り来る				
六四	上	8		是の如く	是のごとく				
	下	19		寄せ来る	寄り来る				
		10		是の如く	是のごとく				

